

父親と母親の子育てによる人格発達

白百合女子大学 目良秋子

Personality Development of Fathers and Mothers by Child-care

Shirayuri college MERA, Akiko

本研究は父親と母親の人格発達について子育てにかかわる親の意識と喪失感との関連について調査・分析をおこなった。その結果、子育てをすることによって母親の方が父親よりも成長したと認識していた。また、幼児をもつ母親よりも中学生の母親の方が、無職の母親よりも有職の母親の方がより柔軟になり、発達したと認識していた。子育てに対する親の喪失感は、養育不安および夫婦間の意見の不一致、不満足感と関連があった。親自身の成長の認識は、子どもとの一体感をもっていること、子どもを尊重した養育態度をとることと関連していた。母親は子どもを育てることに不安であったり、夫婦で意見が合わないと、自分が親となっても成長したとは思いがたいが、父親にはそのような傾向はみられなかった。このような父親と母親の違いについては、育児への参加の違いや育児をとおして得られた経験がさまざまなことについて考え直す機会を養育者に与えることによるのではないかとということが示唆された。

【キー・ワード】父親と母親の人格発達，夫婦間不一致，喪失感

The purpose of this study is to examine the personality development of fathers and mothers by child-care, and to clear that the personality development of parent is related with the parent's feelings and ideas for child-care. The main findings including following; the parents who have the feelings of emptiness for child and child-care are disagreement with their partner, and the negative feelings of mothers are related with their personality development, but those of fathers are not.

【Key Words】Personality development, Fathers and mothers, Disagreement with partner, Emptiness

問 題

親が子どもを育てるということ＝親役割の遂行には、親ではあるけれども子育てに否定的、あるいはアンビバレントな感情を抱く自分と、子どもの親であるという立場から実際に子どもの世話・養育を行わなくてはならない自分との葛藤があると思われるが、現代の子育ての状況は社会問題にもなっているように育児不安、母子癒着、さらには幼児虐待などの問題が物語るように、これらの葛藤の対処がうまくいかず、親にとっても、子どもにとっても危機に面した状況が一部にはあると言えるであ

ろう。

親であるということは、個人として生きること以外に、責任の下に子どもを養育しなければならないという義務が付加されているため、自分の思い通りにならないことや、子どもが言うことを聞かず反抗することがあっても、親は自分の心の中に親として失格なのではないかという葛藤や喪失感を抱きつつも、子どもを養育することから逃れることが難しく、その中で親は親役割を遂行しつづければならぬという苦勞がある。一般には子どもは親にとってかけがいのない存在であり、こうした苦勞を厭わないであろうが、一方では、一生懸命子育てしてきたつもりであったが、子どもがうまく育たない、子どもに裏切られた思いがする、自分の子どもではあるけれども、子どもをどうしてもかわいと思えないなどといった悩みをもつ親も少なからずいる。最近ではそうした苦勞の多い子育てよりも個人の生き方に価値を置いたシングル志向やDINKSというライフスタイルをとる者も増えてきているほどである。

ところで、“育児は育自”と言われるように、子どもを育てることを通じて、それまで経験することがなかったことを体験したり、子どもを持つ前には気がつかなかったことに気づくということがあがる。自分を育ててくれた親や世話になった人への感謝の気持ちやいたわりの気持ちを持つようになり、自分の思う通りにはならないこともあり、他の人と協力することの大切さを知るなど、子どもを育てることによって親の方が人間的に成長するということを意味している。これらの変化は、人間の人格発達においても重要な側面であり、社会的に見ても非常に大切なテーマでもある。

しかし、親を対象とした発達心理学の研究のなかで、親自身の内面の発達を総括的に扱った研究は、柏木・若松(1994)の研究の他には少ない。柏木らは「親の発達」尺度を開発し、<柔軟さ>、<自己抑制>、<運命・信仰・伝統の受容>、<視野の広がり>、<生き甲斐・存在感>、<自己の強さ>といった親となることによる人格発達の側面を見出した。そして、育児や子どもに対する肯定的な感情を親もっていると、父親も母親も親となって変化・発達したという意識をもつこと、また育児に対して強い制約感をもっている母親は親となつての発達、特に柔軟さや生き甲斐・存在感をもちがなくなっていることから、親としての発達は子どもや子育てにかかわる親の感情と深く結びついていることが明らかにされたとともに、親のもつ性役割観との関連も指摘されている。

子どもを育てるときに親がネガティブな感情を抱き、コントロールできずに自信を失う、あるいは子どもにあたるという事態は誰にでも起こりうることであると考えられる。こうした親に対して、カウンセリングや同じ問題意識をもつ親の会などによる支援がこのところ多くなされるようになってきているが、これから、子育てを担う親をサポートするためには、親の悩みに共感し、不安な気持ちをよく聴くということに焦点を当てたサポートだけではなく、子どもを育てるという行為を通して、親自身も人間的に成長するというプラス面を強調することも大切なのではないだろうか。これまで、子どもは母親が育てるものという価値観が浸透していたが、今では父親も母親と同様に子どもを育てることにより人間的に幅ができ、成長することができ(ボブ・グリーン, 1987; ピエーロ・フェルッチ, 1999)、父親の育児への参加が母親の発達にも影響を及ぼす(柏木ら, 1994)ということが示されてきている。親が成長することは、何よりも子どもの成長にとって有意義なことであると思われる。

しかし今のところこの点について強調するには、親の研究がまだ十分であるとはいえない状況で

ある。育児に対して母親が制約感や育児の負担感をもつことは、夫が子育てに関わってくれていると母親が思えるかどうかと関連してくる(牧野・中西, 1985)という。しかし、父親の育児不安についてはどうであろうか。幼児をもつ親と思春期の子どもをもつ親とでは親としての発達に違いがあるのかどうかなど、生涯発達の視点からの検討もなされていかなければならないであろう。また、親としての発達を考える以前に、親の無力感、喪失感をもつということと子育てについて夫婦で意見が一致している、あるいは一致していないということが影響しているのか、個人的な感情と親としての責任をどうコントロールしていくのかなどといった問題を明らかにしていく必要があると思われる。

そこで、本研究においては親としての発達が幼児をもつ父親・母親と中学生をもつ父親・母親とで違いがあるのかどうか、また子育てにおける親としての葛藤や自信喪失がどのような子どもや子育てにかかわる感情・考え方を背景としているのか、そしてそれらが親としての発達とどう関係するのかということについて検討することを目的とする。このような研究目的にもとづき、本稿は幼児と中学生の親の発達、子育てに対する考え方、親としての喪失感についての全般的な結果報告を中心とする。

方 法

調査対象：3歳から6歳までの幼児をもつ父親と母親175組と、12歳から15歳までの中学生をもつ父親と母親。子どもの性別の割合は、幼児では男子92名、女子83名、中学生男子87名、女子68名である。兄弟数の平均(SD)は、幼児では1.94(0.70)、兄弟の年齢0歳から15歳、中学生では兄弟数の平均2.28(0.73)、兄弟の年齢は1歳から27歳である。幼児の父親の平均年齢は36.6歳、母親34.0歳(分布は父親24歳から56歳、母親25歳から45歳)、中学生の父親の平均年齢は44.3歳、母親41.8歳(分布は父親34歳から54歳、母親31歳から52歳)である。子どもに兄弟がいる家族は、幼児では全体の74.5%、中学生では全体の89.0%である。父親の職業は全体の74.6%が会社員であり、8.8%が自営、母親は全体の60.3%が無職、33.0%がなんらかの形で職業をもっている。親の最終学歴については、父親の大卒以上は全体の43.2%、母親は大卒以上が17.0%、短大・専門学校卒が31.2%である。家族形態は、330世帯のうち69世帯(21%)が拡大家族、261世帯(79%)が核家族である。

手続き：埼玉県下のI幼稚園および神奈川県下のN公立中学校に通う園児・生徒を通じて、その両親に調査を依頼し、園児・生徒を通じて幼稚園・中学校にて回収した。調査は2000年7月に行った。

調査内容：父親と母親に次のような内容の質問紙調査を行った。幼児をもつ親も中学生をもつ親も同じ質問紙を用いた。親となることによる発達については、柏木・若松(1994)の「親の発達」尺度の項目に筆者が一部追加した項目の計52項目である。その他、子育てに関わるさまざまな感情や考え方についての質問52項目、親としての喪失感についての質問17項目が設けられている。また、親の年齢・職業・学歴、子どもの人数・性別・年齢、家族形態についての質問、子育てで苦労したり、悩んだ経験とその問題についてどのような解決を試みたかについて自由記述で回答を求めた質問からなる。親の発達、子育てに関わる感情・考え方、親としての喪失感の質問に対して、4段階評定で回答の選択を求めた。また、分析には父親と母親の両方の回答がそろって得られた330組を対象とし

た。

結 果

1. 親となることによる発達

父親と母親の全回答にもとづいて、因子分析を行ったところ次の6因子が得られた(主因子法・プロマックス回転)。ほぼ柏木らと同様の因子が抽出されその結果を参考として、第1因子から<自己抑制>、<運命・伝統の受容>、<生き甲斐・存在感>、<自己の強さ>、<柔軟性>、<自己主張>と命名した。自己抑制、運命・伝統の受容、生き甲斐・存在感、自己の強さ、柔軟性についてはほぼ柏木らの結果と同じ内容の項目から成っていたが、これらに加えて「自己主張」という因子が得られた。ここでの自己主張とは、妥協することなく自分の意見をきちんと主張するようになった、物事に積極的になったなどの変化を表す。この点については、日本人にとっては苦手とされてきた側面であったが、子どもを育てることによって、自己を抑制するばかりではなく、主張すべきところで主張することができるようになる、自己制御の発達がなされることは注目に値することと考えられる。項目内容と因子負荷量行列については付表1の通りである。

まず同じ子どもの親である父親と母親が、子どもをもつことによってそれぞれどのくらい成長・発達したととらえているかみることにする。各因子項目の合計得点の平均で、夫婦間の比較をしてみると、いずれの次元においても父親より母親の方が親となることによる変化が大きい(表1)。この結果は先行研究の柏木らの結果とも一致している。6因子中最も変化が大きいと親が感じているのは、父親では生き甲斐・存在感、母親では自己抑制であった。この2つの因子は、父母双方において親となつてからの変化の大きい1位と2位の上位を占めていた。自己主張については、父母ともに最も変化が小さいものであった。

これらの変化が子どもの年齢と関連があるのかどうか、つまり子育ての経験が長いほど親としての成長が促されるものなのかどうかを検討するために、子どもの年齢によってサンプルを幼児の親と中学生の親の2群に分けて得点を比較した(表2)。

表1. 父親と母親の「親となる」ことによる発達の比較
— 因子の得点平均(標準偏差) —

	父親		母親	P
自己抑制	2.63 (0.68)	<	3.17 (0.70)	***
運命・伝統の受容	2.31 (0.46)	<	2.66 (0.60)	***
生き甲斐・存在感	2.75 (0.54)	<	3.00 (0.69)	***
自己の強さ	2.25 (0.46)	<	2.77 (0.63)	***
柔軟性	2.47 (0.62)	<	2.66 (0.61)	***
自己主張	2.24 (0.52)	<	2.44 (0.48)	***

***P< .001

表2. 子どもの年齢別の比較

	父親		母親	
	幼児	中学生	幼児	中学生
自己抑制	2.67 (0.65)	2.59 (0.71)	3.17 (0.46)	3.17 (0.47)
運命・伝統の受容	2.31 (0.53)	2.31 (0.56)	2.65 (0.47)	2.66 (0.46)
生き甲斐・存在感	2.81 (0.60)	2.69 (0.63)	3.02 (0.50)	2.97 (0.54)
自己の強さ	2.25 (0.69)	2.24 (0.72)	2.75 (0.56)	2.78 (0.63)
柔軟性	2.47 (0.68)	2.46 (0.71)	2.57 (0.64)	< 2.76 ** (0.60)
自己主張	2.27 (0.62)	2.20 (0.61)	2.45 (0.49)	2.43 (0.46)

**P< .01

父親においては、有意な得点の差はみられなかった。母親においては、柔軟性のみにより有意な差がみられ中学生をもつ母親の方がより柔軟になったと感じていることがわかった。子どもが小さいうちは親の言うことを聞かせることも比較的容易なことが、子どもが気難しい思春期に入った中学生にもなると親の言うことに反抗したり、友人との交際や進路についてなど親に心配をかけるようなことが日常の出来事として体験させられる。そうした問題や葛藤を体験してくると、ひとつのことにこだわらない柔軟な姿勢ができてくるのであろう。また、自己を抑制することや生き甲斐・存在感などは、子どもが幼いころより親にとっては自分が親となる前と比べて変わったと意識されやすい側面であることも考えられ、子育ての経験年数にあまり反映されていないのかもしれない。

次に親としての発達が子どもへの関わり方と関連しているという指摘が先の研究であるが、母親が

仕事をもっていることがどのように影響を及ぼしているのかをみることにする。表3に父親と母親別に母親の職業の有無によって親としての発達を比較した結果を示した。

この表からわかるように、今回のサンプルにおいては、父親では差はないものの、母親がなんらかの仕事をしている場合の方が無職の母親よりも親となることによって発達したと意識していることがわかる。変化が大きかったのは、自己抑制、生き甲斐・存在感、自己の強さ、柔軟性の4因子であった。この結果は、先の柏木らの結果とは異なるところである。

しかし、今回有職の母親の方が親となってから自分が成長したと意識しているという結果については次のようなことも考えられるのではないかとと思われる。働く母親の場合には多重役割によってストレスが高いということもあるが、それには家庭や職場、保育園や学校というさまざまな場所において子どもや他者への配慮をしつつ時間の都合をつけるといった“アレンジ”するという気苦労があってのことではないだろうか。

この働く母親の“アレンジ”にはストレスが多く、いろいろな選択をせまられ悩んだり、考えさせられたりということがあがる(婦人公論, 2001)が、その悩んだり、考えさせられたりといったことが

表3. 母親の就業別にみた親の発達

	父親		母親	
	母有職	母無職	母有職	母無職
自己抑制	2.61 (0.67)	2.63 (0.67)	3.25 (0.48)	> * (0.45)
運命・伝統の受容	2.30 (0.55)	2.31 (0.55)	2.66 (0.47)	2.64 (0.46)
生き甲斐・存在感	2.72 (0.56)	2.75 (0.63)	3.07 (0.52)	> * (0.52)
自己の強さ	2.21 (0.70)	2.24 (0.69)	2.87 (0.61)	> * (0.58)
柔軟性	2.46 (0.66)	2.45 (0.69)	2.85 (0.60)	> *** (0.61)
自己主張	2.19 (0.58)	2.23 (0.62)	2.48 (0.45)	2.38 (0.47)

*P<.05 ***P<.001

先にあげた親となることによって人格的に成長・発達する要素につながるものが多く含まれていると考えられる。おかれた境遇は異なっても、障害児をもつ親(目良, 1998)の場合や不登校の子どもをもった親(栗原, 1998)が、問題を受容し、ショックや葛藤を乗り越えたことによって親も人格的に発達できたと思えるようになるということと共通した背景があるように思われる。この点については今後検討していくことが必要なことである。

2. 子育てにかかわる親の意識

先の結果が示したように、親自身が子どもを育てることによって、成長・発達したと思えることと、子育てにかかわる意識とはどのような関連があるのであろうか。この点について検討するために、ま

ずさまざまな子育てにかかわる考え方についての父親と母親の回答について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。（項目および因子分析回転後の因子負荷量行列については付表 2. を参照のこと。）

因子分析を行った結果、第 1 因子＜養育不安＞、第 2 因子＜子どもとの一体感＞、第 3 因子＜個の重視＞、第 4 因子＜夫婦間不一致＞、第 5 因子＜学歴志向＞、第 6 因子＜教育の責任＞、第 7 因子＜過度の介入回避＞の 7 因子が得られた。それぞれについて、父親と母親で各因子の合計得点の平均を比較した（表 4）。

子どもの教育を考えたときに学歴を大事だと思う＜学歴志向＞と、やはり子どもの教育についての考え方で子ども自身のもてる能力を尊重していきたいと思う親の子どもへの＜過度の介入回避＞においては、父母間で差はみられない。夫婦間で差がみられたのは、＜養育不安＞、＜子どもとの一体感＞、＜夫婦間不一致＞、＜教育の責任＞、＜個の重視＞であった。なかでも、教育の責任は夫婦間における差が最も大きい。これらの因子は、日本の親子の場合、母親が主に子どもの養育を担当しているという視点から見ると相互に関連していることが伺われる。つまり、今回の調査対象になった母親は主たる養育者であり、子どもの養育を一手に引き受け、責任を感じているが、子どもが何を考えているかわからない、子どもが言うことを聞かないとイライラしてしまう、またそう思ってしまう自分が情けなくなる。しかし、積極的にその役割を引き受けているかどうかは別として、子どものもう 1 人の親である父親とは子育てについての意見が一致せず、また相談したくてもなかなか相談できずにいるジレンマを感じていると考えられる。

このような母親役割に密着した状態から自己を取り戻したいという想いは父親よりも母親の方が強いのは納得のいくところである（＜個の重視＞の平均得点 父親 3.15、母親 3.31）。子育てにかかわる意識の次元のなかで＜個の重視＞は、父親も母親も最も得点の高いものであった。親であっても、個人としての生き方を大事にしていきたいという気持ちは父母ともに高いが、はたして実生活のなかでどれほど親の個人的な時間や楽しみをもつことが達成されているのかは疑問であり、また母親の場合には、個人を大事にしたいということにおいては父親と想いは一緒であっても、親役割に徹しており家庭生活に密着している状況から考えると、達成されていると思えるかどうか、その感じ方は父親とは異なっていることも考えられる。

このように夫婦間で相違がみられた子育てにかかわる意識について、子どもの年齢別にみると、子どもとの一体感についての得点の平均は、父母ともに幼児の親の方が中学生の親よりも高かった（表 5）。また、中学生をもつ母親の夫婦間不一致の得点が父親よりも高く、幼児の母親よりも夫への不

表4. 子育てにかかわる親の意識の比較

	父親	母親	P
養育不安	2.02 (0.47)	< 2.27 (0.51)	***
子どもとの一体感	2.92 (0.59)	< 3.05 (0.54)	**
個の重視	3.15 (0.45)	< 3.31 (0.52)	***
夫婦間不一致	1.78 (0.55)	< 2.07 (0.75)	***
学歴志向	2.49 (0.62)	2.50 (0.57)	
教育の責任	2.05 (0.52)	< 2.48 (0.72)	***
過度の介入回避	3.05 (0.65)	3.10 (0.58)	

P<.01 *P<.001

満が高い。難しい年頃の子どもをもつと、父親に相談したいと思うような問題がでてくることもあるが、仕事からの帰宅が遅いなどで、なかなか夫婦で話し合う機会をもつことができない状況が母親の不満をつのらせていくのではないだろうか。

次に、母親の就労によって子育てにかかわる意識の違いがあるのかどうかみることにする(表6)。母親の就労状況による親の子育てに対する意識を父親と母親においてみると、父親は母親の就労の有無にかかわらず、差はみられなかった。一方、母親では個の重視のみ有意な差がみられ、働いている母親の方が無職の母親よりも親役割を離れた個人としての生き方を大事にしたいという思いが強いことがわかった。

表5. 子どもの年齢別の比較

	父親		母親	
	幼児	中学生	幼児	中学生
養育不安	1.99 (0.43)	2.05 (0.50)	2.25 (0.54)	2.30 (0.47)
子どもとの一体感	3.04 (0.55)	> 2.80 *** (0.60)	3.15 (0.56)	> 2.94 *** (0.50)
個の重視	3.17 (0.46)	3.14 (0.45)	3.27 (0.54)	3.35 (0.50)
夫婦間不一致	1.74 (0.56)	1.84 (0.54)	1.98 (0.72)	< 2.16 * (0.79)
学歴志向	2.50 (0.61)	2.47 (0.63)	2.55 (0.58)	2.45 (0.56)
教育の責任	2.07 (0.52)	2.02 (0.52)	2.54 (0.69)	2.41 (0.75)
過度の介入回避	3.07 (0.63)	3.02 (0.68)	3.07 (0.58)	3.15 (0.57)

*P<.05 ***P<.001

表6. 母親の就労別の比較

	父親		母親	
	母有職	母無職	母有職	母無職
養育不安	2.00 (0.53)	2.03 (0.43)	2.21 (0.43)	2.30 (0.53)
子どもとの一体感	2.92 (0.63)	2.91 (0.56)	3.09 (0.53)	3.00 (0.53)
個の重視	3.17 (0.47)	3.15 (0.45)	3.41 (0.56)	> 3.27 * (0.48)
夫婦間不一致	1.76 (0.53)	1.80 (0.56)	2.12 (0.80)	2.03 (0.73)
学歴志向	2.40 (0.62)	2.51 (0.62)	2.49 (0.51)	2.49 (0.60)
教育の責任	1.98 (0.53)	2.07 (0.51)	2.46 (0.72)	2.50 (0.73)
過度の介入回避	3.00 (0.71)	3.05 (0.63)	3.09 (0.56)	3.09 (0.58)

*P<.05

家庭の経済状況によって働かざるをえない母親もなかには含まれているかもしれないが、家事や子育ての役割だけでなく自分自身のために外に出ることを希望している母親も同時に存在していると思われる。

3. 親の発達と子育てにかかわる親の意識との関連について

さて、こうした子育てにかかわる親の意識の持ち方は、親の発達とどのような関係があるのか次にみることにする。表7は父母ごとに親の発達と子育てに関わる親の意識について各因子間の相関をまとめたものである。

育児の肯定的感情と親の発達は関連があるという先に記した柏木らの研究結果と同様に、子どもとの一体感は父母の親の発達のすべての因子とかなり高い正相関を示している。

母親だけについてみると、母親の場合は養育不安と夫婦間不一致が生き甲斐・存在感および柔軟性と負相関であり、子どもの養育の不安が高い、あるいは夫婦で子育てについて意見が合わない・夫に対して不満を感じる事が高いと、子どもを育てても生き甲斐がもちがたく、柔軟な態度もとりがたくなるといった傾向にある。この点についても、柏木らの制約感と柔軟さ、および生き甲斐が負の相関関係にある点と重なる結果となった。

母親の学歴志向は自己抑制、生き甲斐・存在感、自己主張と、教育の責任は自己主張と正相関であった。過度の介入回避は自己抑制、運命・伝統の受容、生き甲斐・存在感、柔軟性と正相関であった。子どもの教育の責任をまかされている母親が、子どもに必要な以上に手や口を出さないように心がけていくには、子どもが自分でやるまで待つという親の耐性が要り、それには言いたいことを我慢する、今ある状況を受け入れ、柔軟にふるまうこととつながっていると考えられる。

表7. 親の発達と子育てにかかわる意識との相関

	自己抑制		運命・伝統の受容		生き甲斐・存在感		自己の強さ		柔軟性		自己主張	
	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親
養育不安	0.07	-0.10	0.09	0.03	-0.10	-0.27	0.09	-0.10	-0.04	-0.24	0.07	-0.06
						***				***		
子どもとの一体感	0.42	0.38	0.30	0.23	0.57	0.53	0.32	0.28	0.28	0.23	0.27	0.31
	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
個の重視	0.08	0.08	0.05	0.01	0.11	-0.05	0.05	0.09	0.03	0.03	-0.04	0.06
					*							
夫婦間不一致	0.06	-0.08	0.07	0.04	-0.06	-0.17	0.08	-0.07	-0.04	-0.21	0.04	0.01
						**				***		
学歴志向	0.19	0.11	0.20	0.07	0.21	0.20	0.10	0.06	0.07	0.05	0.05	0.23
	**	*	***		***	***						***
教育の責任	0.26	-0.01	0.24	0.10	0.32	0.06	0.15	0.06	0.22	-0.03	0.22	0.16
	***		***		***		**		***		***	**
過度の介入回避	0.18	0.20	0.12	0.18	0.16	0.13	0.13	0.11	0.13	0.21	0.17	0.97
	**	***	*	**	**	*	*		*	***	**	

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

一方、父親の場合には、教育の責任と過度の介入回避が子どもとの一体感を含め、親としての発達の6因子すべてと正相関であった。特に教育の責任と過度の介入回避については、親の発達すべての因子と正相関がみられた。親の発達は親が子育てに肯定的感情をもつことと関連があるという視点から考えると、母親には負担に近い感じで受け取られている子どもの教育の責任が、父親にとっては、肯定的なものとして受け止められているのではないだろうか。その他、個の重視と生き甲斐・存在感が、学歴志向と自己抑制、運命・伝統の受容、生き甲斐・存在感が正相関であった。また、母親では負相関であった、養育不安と夫婦間不一致は、親の発達因子すべてにおいて相関はみられなかった。

それでは、育児に肯定的な気持ちをもてないでいる親について、さらに詳しく検討するために、親が子育てに自信を喪失し、無力感や虚しさを感じる親についてみてみることにする。喪失感・無力感については、父母の回答を因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行なった結果えられた3因子のうち、因子負荷量の高かった第1因子に含まれた5項目の合計得点の平均をその尺度として用いることとした。

子育てにあたり、親が喪失感を抱く様子を見ると、父親よりも母親の方がその傾向が高かった(父親平均 1.75, SD0.48; 母親平均 1.99, SD0.59; $P < .001$)。

喪失感と親の発達および子育てに関わる意識との相関をみると、母親だけでなく父親においても養育不安と夫婦間不一致において高い負相関がみられた(表8)。

父親の喪失感と自己抑制、運命・伝統の受容、自己の強さ、自己主張とは正相関、個の重視とは負相関、母親においては、生き甲斐・存在感、柔軟性、子どもとの一体感と負相関、学歴志向とは正相関であった。

表8. 親の喪失感と親の発達および子育てにかかわる意識

	喪失感		
	父親	母親	
自己抑制	0.13	*	-0.09
運命・伝統の受容	0.16	**	0.04
生き甲斐・存在感	0.01		-0.29 ***
自己の強さ	0.19	***	-0.07
柔軟性	0.05		-0.18 **
自己主張	0.12	*	0.01
養育不安	0.61	***	0.70 ***
子どもとの一体感	-0.01		-0.18 **
個の重視	-0.11	*	0.05
夫婦間不一致	0.41	***	0.49 ***
学歴志向	0.09		0.12 *
教育の責任	-0.02		0.02
過度の介入回避	-0.08		-0.07

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

考 察

本研究結果では、自分が親として行ってきたことが報われていない虚しさを感じるほど、子どもの養育をすることにあたり親は不安になり、また夫婦で不満が強くなるということが示された。人は何か悩んだり、困ったことがあると人に話しを聞いてもらうだけで気持ちが楽になる、落ち着いたということがあるが、父親も母親も夫婦で子どものことについてきちんと話し合う機会をもたないと、喪失感をさらに抱いてしまうようになっていくのではないだろうか。

しかし、このような父母で共通した傾向も親としての発達との関連でみると、父親と母親とは異なった傾向が見られる。表7にあるように、母親の場合は養育不安と夫婦間不一致が親の発達と関連があったが(生き甲斐・存在感および柔軟性とは負相関)、父親の場合には母親と同じように子育てに対する喪失感と強い関連がある養育不安と夫婦間不一致が親の発達とは関連がみられなかったのである。この点については、子どもにどれほどかかわっているかということが影響していると思われる。今後、積極的に子育てにかかわっている父親について検討する必要があるであろう。

また、他の視点からもこのことについては考えられるのではないだろうか。それは、子どもの養育に主にかかわっている母親は、育児に対して肯定的感情も否定的感情も両方を持ち合わせたアンビバレントな心境にあることがわかっているが(柏木ら, 1994), 単に子どもにかかわる時間が長ければ、親となることによって自分が成長したと実感するというのではなく、子どもに接することを通じて経験する肯定的感情と否定的感情の入り混じった複雑な気持ちが親にさまざまなことを考える機会を与え、ひとつのことにこだわらない柔軟さや、他人の立場に立って物事を考えてみるように促しているのではないだろうか。この点については、肯定・否定的感情を個々にみていくほかに、両方の感情のバランスがどのようなものであるのかという視点から検討すること、個としての生きかたと親役割との関連から検討することが可能なのではないだろうか。

また今後の課題として、今回は父親と母親の回答がそろって得られたデータを分析に用いたが、離婚が多い社会的傾向を鑑み、今後は1人親の家庭の場合についても親となることによる発達について検討していくことを考える必要があるだろう。

引用文献

- Bob Greene. (1987). *ボブ・グリーン*の父親日記. 西野薫, 訳. 中央公論社. (Good Morning, Merry Sunshine: A Father's Journal of His Child's First Year. 1984).
- 婦人公論: <特集>働く母親は、悩んで笑って. (2001). 中央公論新社.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5, pp.72-83.
- 栗原輝雄. (1998). ある登校拒否児の母親の子ども受容過程: “喪失の受容” という視点から. *カウンセリング研究*, 31, pp.154-164.
- 牧野カツ子・中西雪夫. (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安: 父親の生活および意識との関連. *家庭*

教育研究所紀要, 6, pp.11-24.

目良秋子. (1998). 障害児をもつ親の人格発達：価値観の再構築とその要因. *発達研究*, 13, pp.45-51.

Piero Ferrucci. (1999). *子どもという哲学者*. 泉 典子, 訳. 草思社. (I bambini ci insegnano. 1997).

<謝 辞>

本研究の調査にご協力いただいた N 中学校, I 幼稚園の教職員の方々, ならびに保護者の方々に感謝の意を表します。また, 本論文の指導にあたり, ご指導頂きました白百合女子大学柏木恵子教授に深く感謝申し上げます。